

論文

ボルネオ・ロングハウス観光の変容にみる再場所化

服部 泰*

“Re-territorialization” in Transformation of Longhouse-Tourism in Borneo

Toru HATTORI

要旨

観光資源とりわけ文化資源は、人間が主体となって営まれるものであるならば、時間の経過にしたがい変容を迫られるものである。それが観光の持続可能性の一つの課題である。観光地の住民は観光資源のあるその土地／空間に自らの生の意味を見出すような「場所性」を感じている。しかし、そうした土地／空間は近代化が進む過程において機能的で画一的な空間としての「没場所性」をもたらし、その空間との結びつきを弱める。観光開発はまさに「没場所性」をもたらす一例である。しかし、本来人間は空間との結びつきを求めて観光をするのではないだろうか。そこに観光地の「再場所化」の可能性が秘められている。本稿では1990年代から2010年代まで、10年区切りでボルネオ・ロングハウス観光の分析に取り組み、ロングハウスでどのように「場所性」が失われ、「没場所性」が生まれ、しかし観光の本質としての「再場所化」がもたらされるのかを検討した。その結果、ロングハウス観光の隆盛にともない場所性が失われ、高齢化、人口減少、収入の減少が起こるが、それがかえって「再場所化」を促した例がみてとれた。

1. 序 ―観光資源と生活―

マスツーリズムがもたらす環境問題やオーバーツーリズムが問題視され、持続可能な観光が問われて久しい。しかし、世界の年間海外旅行者数は増え続け、2018年には14億人を超えたといわれている。国内でも訪日外客数が増え続け、3000万人を超えるに至った。また、観光による地域活性化が謳われる一方、オーバーツーリズムが喫緊の課題となり、観光のあり方がますます問われることとなっている。観光が産業の1つとして経済活動をとまなう以上、観光資源や施設の

* 東海大学観光学部観光学科

投稿日 2019 年 12 月 11 日 受理日 2020 年 1 月 15 日

開発、産業としての発展や成長は必要なことであり、常に変化が求められることも否めない。しかし、その原資となるのが自然資源や文化資源である以上、この資源の持続可能性こそ模索されなければならないだろう。

自然資源や文化資源はそこで営まれている人間の生活と密接に結び付いている。したがって、その対象は観光資源となる以前からそこに住む人々にとって意味のある場所であろう。しかし、やがて観光資源となることでその場所の変容し、消費されていく。そうした変容の過程をつぶさに観察し、意味を見いだすことが観光の持続可能性の1つの道なのではないだろうか。本稿では、人間による自然・文化的資源としてのボルネオ島の先住民生活体験を主とするロングハウス観光を取り上げ、E. レルフの場所性の概念を用いながらその変容をたどることで、観光の持続可能性の一例を示したい。

2. 観光の没場所性と再場所化

2.1 場所性から没場所性へ

ある空間が時間の経過とともに変容する様はさまざまな分野で研究されてきた。とりわけ有名な議論の一つにレルフの「場所性」の問題がある。例えば、観光開発が進むということはその土地に変化が訪れることを意味する。人間が生活をしていなかった土地が観光地として開発されたり、ある土地の人々にとっての生活空間が外部から来た観光客のための別の意味を持つ空間へと変えられたりしていくのである。レルフはこうした空間の変化を「場所性」と「没場所性」の関係として論じた。人間はある場所で生活をしている。この場所とは実存空間であり、人間にとって意味や意義がある。この場合の場所とは単に空間を指すのではなく、そこに関わる人々の思い出や歴史によって意味を与えられる場所である (Relph, 1976, pp.45-48)。こうした意味／性質、すなわち「場所性」をもつことで、人間はある場所を自らの空間として認識するのである。そしてある場所で生まれ、ある場所で育ち、ある場所へ移動し、ある場所で死を迎えることでそれぞれの場所は人間の人生において極めて重要な役割を果たしていくのである (Wargner, 1972, p.49)。

ラポポートはこの場所について、オーストラリアにおける先住民のアボリジニにとっての場所と、工業都市化していく場所とで比較をしてみせた。アボリジニにとって、彼らの場所は伝説と儀礼と祭礼に彩られ、いたるところが精霊のすみかとなっていて、さまざまな意味をもつ神聖なものであった。しかし、アボリジニにとっての場所は次々に開発され工業都市化していく中で神聖さを失い、機能的でかつ実用的なものとなっていった。すなわちアボリジニにとってその場所の「場所性」は失われていったのである (Rapoport, 1969, pp.15-17)。レルフはこうした状態の性質を「没場所性」と呼んだ (Relph, 1976, p.25)。彼らの場所は、神聖さを失い、意味を失い、かわりに極めて均質で地理的な空間になり下がったというのである。

レルフの指摘の重要な点は、観光地とはまさにこの「没場所性」の特徴を持ったものであるということである。いかなる観光地も、本来はその地の住民が生まれ育ち、その地に記憶や歴史が刻まれ、彼らにとって意味を持つ場所となるのである。すなわちそこに文化が築かれ、維持されることで、彼らによって自然と文化に彩られたその地域独自のローカル性 (locality) が作られる

のである (Prince, 1961, p.22)。このローカル性こそが観光資源となる。観光客はその地域にしかない自然や文化を求めて訪れ、そこで「場所性」に基づくローカル性を感じるのである。ところが、ひとたび観光地として認識されたなら、その地域自体が経済性を持つものとなり、観光客に興味を持たせ、再訪させることが求められる。そのためには安全を確保することも必要となる。観光地化するとはすなわちローカル性が経済性をもつことを意味し、観光客を受け入れるための食事や宿泊のための施設が求められ、増える観光客に対しては新たな観光資源が求められる。こうして観光開発が生まれるのである。したがって、観光開発は好奇心を発揚し、安全性を獲得することに加え、清潔であり、誰もが一様に楽しめるものであることが求められる。観光開発は「場所性」を急速に失わせ (Meyrowitz, 1985=2003, p.51)、「没場所性」を生むのである。「場所性」は住民にとって住みやすさや住みにくさ、時に暴力や対立、イデオロギーや人種の衝突さえも作り出すのだが、観光開発はこうしたローカル性としての政治的な問題を排除し、安全で均質な空間を作り出す²⁾。すなわち、レルフはこのように観光開発とは「場所性」を奪うものであると指摘したのである。

2.2 観光による場所の消費と再場所化

「場所性」と「没場所性」の議論は、観光における「日常性」と「非日常性」の議論と重なる。本来は「日常性」に彩られた場所が観光開発によって「非日常性」を獲得していることは、すなわち「没場所性」を獲得していくことに他ならない (須藤、2008、p.23)。人間が住む多くの場所は人が住むからこそ暴力や対立、イデオロギーや人種上の衝突など政治的な問題を持ち、住みやすさや住みにくさを生む。こうした「日常性」が良くも悪くも「場所性」なのである。しかし、ひとたび観光開発が進めば、観光客にとって安全でかつ一様に楽しむことのできる過ごしやすい空間が目指され、それは観光客にとっての得難い「非日常性」となるのである。そういう意味では観光開発に限らず、そもそも都市の近代化や工業化は、インフラ整備や住宅地の造成において機能的な都市を目指すという点で、空間を安全で平和で時に均質なものとし「没場所性」が生まれるということができる (Lynch, 1972, p.21)。

J. アーリもまた観光と場所の関係について論じている。彼は、そもそも観光とは場所を消費することであるとしている。ある地が注目されて観光客が殺到すると、観光地としての地位を得て経済効果を生む。しかし、一定程度観光が成立すると、観光客は次なる観光地を目指していく。こうして観光地としての場所は消費され続けていくのである (Urry, 1995, p.108)。場所が消費されることは、その場所が一時的かつ急速に人口が増加することを意味する。短期間での都市化、あるいは都市の近代化、工業化が起きているということができる。レルフの議論に従えば、まさにこれが「没場所性」の獲得過程である。つまり、場所の消費こそが「没場所性」を生み出すのである。

しかし、観光開発によって「没場所性」が生み出され、観光地として消費されていくその空間は、もとは「場所性」をもった空間である。ここに場所の再生産の余地、すなわち再場所化 (re-territorialization) の余地が残るのである (Relph, 1976, p.92)。例えば都市の住民が、農山村に関心を持ちグリーンツーリズムやエコツーリズムを目指したり、近代化により失われる歴史性を求め

て古い街並みを観光したいと考えたりするならば、彼らはいつもリアリティーとしての「場所性」を求めているのである。そういう意味では、観光という行為は自らが住んでいる場所の「没場所性」を、観光地の「場所性」によって補おうとする行為であるとも解釈できる。

レルフは場所性の創造という議論の中で、場所は長い時間をかけて、人々の平凡な営みによって作られるとしている (Relph, 1976, p.84)。人々が生まれ育ち、社会や文化を形成維持し、意味を持つ場所自体が好奇心や安全性の量や質にかかわらず、日々の積み重ねとして作られるのである。観光客はせいぜい1週間程度の滞在にとどまるが、観光開発されたその地で住民が「場所性」を作り保つことができ、観光客が「場所性」に基づくローカル性を堪能できたならば、それを「再場所化」として捉えることができよう。

3. ロングハウス観光の成立と概要

3.1 ロングハウス観光の成立

「場所性」と「没場所性」、場所の消費、「再場所化」の過程を検討するため、マレーシア、ボルネオ島の先住民生活体験観光であるロングハウス観光を取り上げる。ロングハウス観光はまさに先住民の生活が「場所性」に彩られたスローライフとして観光客に体験され、その観光資源としての隆盛により場所が消費される過程にあると同時に、観光客にとっての「再場所化」の体験でもあるからである。この検討のために、まずはマレーシアの観光開発におけるロングハウス観光の成立過程から確認したい。

マレーシアは1972年に政府観光局を設立し、本格的に欧米からの観光客を中心とした観光立国を目指して始動した。最初に取り組みされた政策は高級リゾートの整備であり、島嶼部を中心とするビーチリゾートの開発であった。ビーチの整備、宿泊施設の整備、さらにアクティビティーとしての種々のマリンスポーツが開発の対象であった。中でもペナン島やランカウイ島は欧米諸国に知られることとなり、1980年代後半からはバブル期にあった日本にも紹介され、人気を博した(安間、1995)。しかし、同時期にタイなど近隣諸国もビーチリゾート開発に力を入れ、タイのプーケット島などは日本をターゲットとしたプロモーションに成功したことで、マレーシア政府は新たな観光資源の開発に乗り出した。そこで1980年代後半から注目され始めていたボルネオ島の先住民の生活を体験するロングハウス観光は、1990年代に入って本格的に整備された(Sarawak Tourism Board, 1998, p.1)。

ロングハウス観光の原資として重要なのは「手つかずの大自然」としての熱帯雨林(ジャングル)である。したがって、ロングハウス観光は熱帯雨林の象徴として「森の人」を意味するオランウータンや、ボルネオに固有性をもつテングザル、世界最大の花であり希少性が高いラフレシアのイメージとも結びついてきた。多くのロングハウス観光ツアーはオランウータンの保護区の見学やジャングルの散策をともないながら、体験の目玉としてのロングハウスにたどり着く形をとる。

3.2 ロングハウス観光の概要

マレーシア領にあたるボルネオ島北部は、サラワク州とサバ州の2州、および隣国のブルネイ・ダルサラーム国で構成されている。サバ州は州都コタキナバルおよびその周辺がリゾート地として開発された。一方、サラワク州は多くの国立公園を抱え、熱帯雨林を保護する活動が盛んであるため、これにあわせてロングハウス観光が重要な観光資源となってきた。特にサラワク州では人口の30%程度が、最大の先住民族であるイバン族で構成されていることから、ロングハウス観光の格好の地となっている。イバン族の多くはサラワク州の海岸部から山間部まで入り組んだ川沿いに集落を構え、交通手段がロングボートと呼ばれる民族特有の木製の細長い小型ボートであり、そのボートに乗ってジャングルクルーズをしながら集落にたどり着くという点で移動の段階から先住民族の生活を体験できる。

もう一つイバン族のロングハウス観光で重要なのが、首狩り族のイメージである。イバン族には長い間、男性の成人儀礼（イニシエーション）として首狩りの習俗があった。多くの集落で1970年代初頭まで首狩りが実施されていたことから、現在でもロングハウスにはレプリカの首級が飾られることがあり、原始的な生活体験の象徴の一つとなっている。このイメージにより観光客は少しばかりの畏怖の念と緊張感を持ちつつ、原始的であることを実感することで本来の人間的な生活であることを感じて過ごすことになる³⁾。

イバン族のロングハウスはルーマ（luhma）と呼ばれる50m程度の長屋の作りが多く、2メートル程度の高さの高床式住居となっている。また、内部は各家庭の私的空間であるビレク（bilek）と、それをつなぐ公的空間の細長い廊下といえるルアイ（ruai）からなっている（図1）。従来はビレクの戸はよく開け放たれ、ルアイは私的空間と公的空間が交差する場として捉えられてきた（石森、1997、p.48）。観光客はルーマを出て胡椒などの収穫の見学や手伝い、吹き矢体験や闘鶏見学などをし、ルアイでは竹などの材料を使ってかご作りなどを体験する。夜にはルアイの一段高くなったところに布団を敷き蚊帳をかけることで就寝のためのスペースを作る（図2）。

なお、マレーシア政府観光局では正確な数字を把握していないが、ロングハウス観光はアメリカや日本、またヨーロッパではドイツやフランス、オランダからの観光客が中心となってきた。また、近年では中国と韓国の観光客が増加している。



図1 ルアイ（筆者撮影：2015年2月）



図2 ルアイでの観光客の寝床（筆者撮影）

欧米や日本などのいわゆる先進国の人々がロングハウス観光を好む傾向からは、スローライフや原始的な生活体験という観点からも、非日常を求めていることが推測される。しかし、それは同時に、没場所性から逃れ、少しでも長く滞在することでその自然環境と分かち難く結びついた「場所性」への継続的な希求であるともいえよう。

4. ロングハウス観光の変容

4.1 調査概要

本稿ではこれまでに実施した4回のロングハウス観光のフィールドワークを大きく①1997年(1990年代)、②2003年(2000年代)、③2012年と2015年(2010年代)の3つに分け、ロングハウス観光の変容から没場所性と再場所化について検討を試みる。1997年および2003年の調査対象はサラワク州スリ・アマン(Sri Aman)の3つのロングハウスにおける首長(A氏男性、E氏男性、H氏男性)、住民(B氏男性、C氏女性、F氏女性、G氏女性、I氏女性)、同行マレー人ガイド(D氏男性)⁴⁾とし、調査方法は非構造化面接ならびに参与観察を実施した。ここでは主に調査結果をロングハウス観光や集落の変容として捉えることに主眼を置き、変化の部分のみをまとめた。2012年および2015年の調査では参与観察を実施した。

4.2 1997年2月17-20日の調査

1980年以前までは自給自足を基礎としながら、イバン族の主な収入源は胡椒とゴムであったが、サラワク州都のクチンをはじめとする都市部が急速に近代化していくと、集落にも近代化の波が押し寄せた。都市部近郊の農業が近代化すると、焼き畑農業を中心とするロングハウスの非効率的な農法は収入を生まなくなり、1980年代後半からは集落の若者が都市部へ出稼ぎに出ている。時を同じくして、政府がロングハウス生活体験を観光資源化すべく開発に乗り出したため、ロングハウス観光を目的としたヨーロッパからの観光客が増加すると、さまざまな情報がもたらされ、インフラが整備されることでさらに急速に近代化が進み、1990年代の初頭には多くの集落に電気がひかれた。

語り1

- ①テレビは生活に欠かせないものになった (B氏当時30歳代)。
- ②我々の生活はすっかり変わってしまった (E氏当時50歳代)。
- ③ビレクにおける我々の実際の生活は観光客にみせるべきではない (H氏当時60歳代)。
- ④政府の指導によりロングハウス観光で取り組むことが決められた (A氏当時50歳代)。
- ⑤政府の観光政策によってかなり収入が安定してきた (C氏当時20歳代)。

1970年代まで首狩りの習俗が残っていたことは、ロングハウスをはじめとする集落が「場所性」を持っていたことを示す。例えば、男性は自らが首級をロングハウスに持ち帰ることで、日常の場としてそこで成長していくということを通過儀礼として確認していた。すなわち自らの集

落は自らの人生と分かち難い「場所性」を有していたのである。しかし、電気や電波などのインフラ整備は、急速に自らの場所と世界とを結びつける結果となり、彼らの生活は大きく変化していった。とりわけロングハウス観光における観光客の来訪は境界線を曖昧にしていき、「場所性」を失わせていった。一方で、彼らはビレクの生活とルアイの生活を徹底的に分けることで、「場所性」を確保していたということができよう。政府によるロングハウス観光の指導と収入の安定はその生活水準を維持させるという点において日常性を維持させるものでもあり、「場所性」を感じられる水準を守っていたと解釈できる。

4.2 2003 年 2 月 25-28 日の調査

2000 年代に入り、インターネットの普及によりマレーシア政府観光局がホームページを作り大々的にロングハウス観光を宣伝していった。これによりロングハウス観光が隆盛を極め、多くのイバン族の集落にとって観光収入が最大の収入となっていた。観光客からみると、インターネットでの情報収集が容易になり、多くの情報を得ることができるようになった。従来ならば旅行事業者やガイドを通じて行われていたロングハウス観光は、インターネットでの直接のやりとりによって事業者を排した形でロングハウスを訪問する例が増加していった。事業者を介さないことで集落への収入はさらに増加し、観光収入へ依存することとなった。

語り 2

- ①集落の収入の 8 割がロングハウス観光になった (A 氏当時 60 歳代)。
- ②頼まれるので、ビレクを観光客にみせるようになった (F 氏当時 40 歳代)。
- ③観光客が持ち込むさまざまな物品により、集落の生活も変化している (G 氏当時 40 歳代)。
- ④集落の若者が観光客に似た身なりをするようになった (E 氏当時 60 歳代)。
- ⑤近年はルーマの下にさまざまなゴミが捨てられる (D 氏当時 30 歳代)。
- ⑥クチンと変わらない生活ができるようになった (I 氏当時 50 歳代)。
- ⑦ (観光客の受け入れを) やめたいけど、やめられない (H 氏当時 60 歳代)。

ロングハウス観光の隆盛により、彼らの生活空間は大きく変化を遂げた。観光が大きな収入源となったことは、トイレの水洗化や衛生面の改善に寄与した。一方でガイド不在の観光が増え観光客への歯止めが利かなくなったことで、住民は観光客の要望を聞くことが多くなった。とりわけ、彼らの私的空間であったビレク内部を見たいという要望に応えるようになり、実際の生活を晒すことが増えた。また、観光客が持ち込んだドライヤーや電動シェーバー、衣服などを置いていかれるようになり、ロングハウスの若者がそれを利用し始めることが起きた。これにより、以前には伝統的な民族衣装を着ていた若者が、髪型や服装などが都会的なものへと変わっていった。さらに、集落が排出するゴミにプラスチック製品や化学薬品が増えるようになり、環境破壊が進んでいると住民が実感するに至った。すなわち、2000 年代に入り観光地としてのロングハウスが急速かつ大量に消費され、イバン族にとっての「場所性」が失われていった。伝統的なタトゥーなどイバン族としてのアイデンティティが急速に弱まる傾向もみてとれた。この「没場所性」

の状態を集落や首長は、受け入れがたいが生活の糧として受け入れざるを得ないという状況となった。

3.3 2012年2月18-21日ならびに2015年3月1-3日の調査

2000年代に隆盛を誇ったロングハウス観光は、2010年代に入り急速に人気に陰りが出始めた。1980年代後半に始まったものの、先住民生活体験であるという性質から20年ほど大きく内容を変えず、観光客の興味が続かなかったと言われる。また、ボルネオ島において、マレーシアのみならず南部のインドネシア（カリマンタン側）やブルネイ・ダルサラームの集落でも、同様のロングハウス観光が立ち上がったことで、観光客が分散をするようになった。集落における観光の収入源の大幅な減少は、若者たちを都市部の出稼ぎへと向かわせた。その結果高齢化が進み、集落には多くの高齢者と、若い女性、少しの子どもたちが残ることとなった。

調査では観光収入だけでは生活できなくなり、力仕事が可能で若者が出稼ぎに出ていることがわかった。また、子どもたちを大学に行かせる家族が増えた。住民の多くはロングハウス観光の人气がなくなったのではないかと不安になっていた。一方で、ロングハウスの生活はのどかなものになり、観光客の期待に応えなくてよいことで自らの日常生活を優先的することが可能になっていた。ロングハウスの住民はすでに観光客への対応に慣れていたことで対応の負担も軽減され、ものづくり体験でも談笑をしながら時間をかけてものを作る様子が多くみとれた。ロングハウスの人手不足により観光客の行動スケジュールのない時間が増えたが、かえって読書や昼寝などリラックスした時間の使い方が目立った。最も大きな変化は観光客が首長のビレクで食事をするようになったことである。

すなわち、観光客の減少は、集落にとってロングハウス観光を主たる収入から副収入へと変えていったのである。若者の出稼ぎの増加は集落の高齢化を進め、いわゆる生産年齢人口の大幅な減少を生んだ。これにより、観光客のアクティビティーを支えていた若者男性がいなくなり、吹き矢や闘鶏に代わって、高齢の女性が得意とする竹かごなどのものづくり体験が増加した。住民の語りにあるような「観光客の期待に応えなくてもいい」という意識は、同時に期待に応えることのできない現状をもあらわしている。しかし、その方が観光客もリラックスできているという意識は、複数の集落でみてとることができた。

1990年代には「没場所性」が生まれたことでビレク（私的空間）とルアイ（公的空間）をわけ意識が高まり、2000年代に入ってその境界線が崩れ始めたが、2010年代になって首長のビレク（私的空間）を観光客に開放したことは、本来的なロングハウスの機能である私的空間と公的空間の交差を取り戻す結果を生んでいる（図3）。都市部や世界とロングハウスとの意識上の距離感が変わり、若者や子どもたちにさまざまな可能性を与えることが可能になったことも大きな変化であるといえよう。

4.4 考察

1990年代からおおよそ10年区切りで調査を実施し、「場所性」「没場所性」を軸に分析をした結果、各年代において大きな変化がみられた。1990年代以前から始まっていたインフラ整備など



図3 首長のビレクでの住民と観光客の食事（筆者撮影：2015年2月）

のイバン族の集落の近代化は、彼らの「場所性」を失わせていく契機となっていき、1990年代に始まるロングハウス観光の本格化は、さらなる「没場所性」を生んでいった。同時に観光収入が集落を支えるようになりはじめ、観光に力を入れるようになっていった。

2000年代になるとインターネットの普及もありロングハウス観光が隆盛を極め、観光が主たる収入となった一方、個人旅行化が進んだこともあり、観光によってさらに集落の近代化が進んだと解釈できる。これにより、ロングハウス観光がなければ集落に住む意味がなくなるような「場所性」の喪失がみてとれる一方、観光がなければ生活ができないという困難な状況が生まれていた。ロングハウス観光は観光のための文化資源としては一つの飽和状態となっていた。

2010年代に入り、ロングハウスを訪問する観光客が減少したことで観光収入は激減した。好奇心を発揚するための変化を前提としないような文化資源においては、一見ここにロングハウス観光の限界がみてとれる。しかし、観光以外の収入が安定することで観光客の受け入れ自体が大きな負担ではなくなり、ロングハウスの住民の語りにもみられたように、住民にも観光客にも穏やかさやリラックスが生まれた。2000年代まで問題であった私的空間と公的空間の区別も、公私の交差という本来的なロングハウスの空間の意味を取り戻す契機となった。観光客にとっても、アトラクション的でアクティヴィティー的な観光から、本来の目的の一つであった原始的スローライフ体験観光に変化する兆しがみてとれる。

すなわち、ロングハウス観光は「場所性」が失われ、観光地の消費が進み、「没場所性」が生まれた段階から、ロングハウスの住民にとっても観光客にとっても、ロングハウスのローカル性を活かした「再場所化」の段階へと移行しているのである。

5. 結 一観光の持続可能性を目指して一

観光の持続可能性を考える際、産業としての持続性を考える前提として観光資源の持続性を考える必要がある。なぜなら自然資源であれ文化資源であれ、観光資源は常に変化に晒され、変容を迫られるからである。

その変容を分析する概念としてレルフの「場所性」「没場所性」「再場所化」を用いた。人間は、良くも悪くもさまざまな思考や体験をすることで自らが住まう土地/空間と分かち難く結びつく。レルフをそうした空間の性質を「場所性」と呼ぶ一方、近代化された画一的な空間の性質を「没場所性」と呼んだ。その点で「没場所性」とはローカル性を失い、意味づけがしづらくなった空間の性質である。観光開発によって作られ、あるいは観光地化することで変化するような資源は、まさにこの「没場所性」を獲得する。この変化の過程で観光地が消費されるならば、観光の持続可能性は生まれない。

しかし、観光とは本来、「場所性」を失った（と感じる）人々が再帰的に「場所性」を獲得しようとする行為であると考えられる。古い街並みや農山村にノスタルジーを感じるような観光は、まさにその地のローカル性を感じ、意味づけをしようとするような、すなわち「場所性」を見出そうとするような観光である。

本稿では非構造化面接を基盤にしたフィールドワークを通してボルネオ島のロングハウス観光の変遷を分析した。その変化の過程から、ロングハウス観光において「場所性」が失われ、「没場所性」が生まれる中で観光地の消費が進む段階から、本来の目的であるスローライフ体験観光があらわれ、観光地にとっても観光客にとってもローカル性にもとづく「再場所化」の段階へと移行する例がみてとれた。

そもそも近代化、工業化、都市化によって「没場所性」が発生した際に、人々にとって観光行為が、その地へのローカル性にもとづく「再場所化」を求めるようなものになるならば、そこに観光の持続可能性を見出すことができるのではないだろうか。ボルネオ島のロングハウス観光はそうした文化資源における持続可能性の一例となることが期待される。

註

- 1) レルフの“placelessness”に対しては「脱場所化」や「没場所性」など文献によっていくつかの訳語が当てられているが、本稿では高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳（1991）の「没場所性」を最も汎用な訳例として採用する。
- 2) レルフは「没場所性」の一例としてテーマパークを挙げている。テーマパークでは、政治性や暴力性は一切排除され、安全で均質な空間が作り出されるとしている。
- 3) 首狩りの習俗に関する詳細や、観光客が感じる感覚については拙著（服部、2011）を参考にされたい。
- 4) プミブトラ政策によって、マレー人の雇用が促進された。このマレー人には華僑や印僑を除くすべての人が含まれ、オラン・アスリ（Orang Asli）と呼ばれるボルネオ先住民も含まれる。

引用文献

- 服部泰（2011）,「ボルネオ・ロングハウス観光における文化の仲介者」『東海大学紀要 観光学部』第1号, pp.15-30.
- 石森秀三編著（1997）,『観光の20世紀（20世紀における諸民族文化の伝統と変容）』ドメル出版.
- Lynch, k. (1972), *What Time is This Place?*, MIT Press.
- Meyrowitz, J. (1985), *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*, Oxford University Press.
- （安川一・高山啓子・上谷香陽訳（2003）,『場所感の喪失（上）』新曜社.）
- Prince, H. (1961), The geographical imagination, *Landscape*, 11, pp.22-25.

- Rapoport, A. (1969), *House Form and Culture*, Prentice-Hall.
- Relph, E. (1976), *Place and Placelessness*, Sage.
- Sarawak Tourism Board (1998), *Tourism Board Annual Report 1997*.
- 須藤廣 (2008), 『観光化する社会』 ナカニシヤ出版.
- Urry, J. (1995), *Consuming Places*, Routledge.
- Wargner, P.L. (1972), *Environments and Peoples*, Prentice-Hall.
- 安間繁樹 (1995), 『ボルネオ島最奥地をゆく』 晶文社.